

■ 論文 ■

もう一つのジモトを描き出す

——地方都市のホームレスの若者の事例から地元現象を考える——

川端浩平

(関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 特任助教)

■ 要 旨 ■ 本論は、著者のホームタウンである岡山市でのフィールド調査をもとに、地元への愛着の表現である地元志向を歴史的に位置づけ、地元への包摂を促すようなとりくみがホームレスの排除と結びつく局面を考察する。そこで第一に、地元という概念を整理する。そのうえで、社会統合の概念としての地元と、個人的な帰属感覚 (sense of belonging) を示す概念であるジモトを区別する。さらに、地元という言葉の系譜を探り、地方や地域といった概念と関連づけることにより、その現代的な意味を明らかにする。第二に、サブカルチャーからまちづくりにまで見られる地元現象の動向を考察し、そこから生み出される様々な問題点を検討する。とくに、包摂の概念としての地元意識が、安心・安全のまちづくりの実践においては排除を招いてしまうという意図せざる結果を指摘するとともに、地域社会における再帰的なとりくみのなかで見失われている人びとのつながりへ目を向ける必要性を指摘する。そして第三に、これらの地元現象をめぐる動向を確認したうえで、岡山市で行った防犯ボランティア団体とホームレスの人びとへのフィールド調査から、固有性を取り戻すために再構築されている地元像がもう一つの意図せざる結果として没個性的になっている側面を考察するとともに、それに対抗するもう一つ (オルタナティブ) のジモト像を描き出すことを試みる。

■ キーワード ■ 地元現象、再帰性、排除、ホームレス

はじめに

——地元が好きで悪いのか——、2010年5月15日の朝日新聞の土曜日版「be on Saturday」の「うたの旅人」という特集の見出しである。とりあげられているのは、八王子市出身の3人組、ファンキーモンキーベイビーズである。彼らの歌詞には「八王子の南口から家までへの帰り道」といったように、自分たちと地元をめぐる世界観が色濃く反映している。また、八王子観光大使を務めていることにもうかがえるように、地元を代表するミュージシャンとして認識されている。

そしてこの記事を書いた担当の記者も八王子の出身である。おそらく40代前半の男性記者は、故郷である八王子について次のように述べている。「社会人になると同時に実家を出て20年余、八王子に望郷の念を抱いたことなど一度もなかった。東京とは思えぬ田舎、退屈なベッドタウン、文化果つる地……自虐のネタにしかならぬ街だと考えてきた」。ところが、ファンキーモンキーベイ

ビーズの3人や八王子の人びとを取材する過程で、八王子の歴史を振り返り、様々な魅力が発見されていくのだ（『朝日新聞』2010年5月15日）。

たしかに、かつてのような「故郷」は存在せず、流動的な時代を生きる私たちにとって、地元は存在論的な意味を与えてくれる。他人から見れば味気ない郊外のベッドタウンなのかもしれないが、そこで生活している人びとにとっては、日々のローカルな実践や意味づけがある。そこには、無数の記憶や経験が存在しており、同じ場所を共有した人びとにしか読み取ることのできない差異やそれを取り巻く歴史の変遷が横たわっている。そのようなローカルな日常生活の記憶と経験を社会で共有することの意義は大きい。

しかし、そのような地元をめぐるイメージが掲げられるときに違和感を覚える場合も少なくない。地元を代表する観光地やユルキャラ、地域ブランド化されただけで味の変わらない饅頭やサブレ。それがいかに自分と関係しているのかさっぱりわからない。それに、自分のルーツを回顧する際に——例えば思わず出くわした同級生と立ち話する場合——感じるインスピレーションとはどうも違う。そしてこのことは、ローカルなイメージの構築を促す地域アイデンティティとしての地元と主観的概念であるジモトは異なる論理で機能していることを示している。

本論では、著者のホームタウンである岡山市へのフィールド調査をもとに、人びとが地元へと回帰する現象について考察する。とくに、地域アイデンティティとしての地元と個人の主観的概念であるジモトが安易に結びつけられることによって生じる問題を検討する。そこで第一に、地元という概念を整理してみることにする。そのうえで、地元とジモトという概念を区別する。さらに、地元という言葉の系譜を探り、その現代的な意味を浮き彫りにする。第二に、日本社会における地元現象を考察し、防犯ボランティアの安心・安全のまちづくりの事例から、地元への包摂が意図せざる結果として排除をとまなうものであることを明らかにする。第三に、これらの地元現象をめぐる動向を確認したうえで、岡山市で行ったホームレスの人びとへのフィールド調査から、再構築されている地元像が招いているもう一つの意図せざる結果を考察するとともに、それに対抗するようなもう一つのジモト像を描き出す方向性を確認したい。

1 地元の時代？

1.1 地元とジモト

岡山市の中心市街地は、90年代後半から00年代にかけてグローバルな基準を満たすための再開発が行われてきた。JR岡山駅の新幹線のプラットホームから眺めてみると、点在する高層マンションが目飛び込んでくる。真下にはオープンスペースが広がり、駅ビルは「さんすて」（サンステーション・テラス）と改められ、今風の装いと空間が広がる。高齢者や障害者に配慮したユニバーサル・デザインの導入、英語のみならず、中国語やハングル表記の標識の設置など、グローバルな基準を満たすインフラ整備が施されている。駅周辺には、国際会議を開催するためのコンベンションセンターも新しく建設された。岡山に限らず、全国の地方都市の主要駅周辺には同じような光景が広がっているだろう。

その一方でそれらの標準化されたインフラは、地域の固有性を示すべく様々な記号やシンボルに

よって差異化が試みられている。所々にオープンスペースが施された駅前が目抜き通りは桃太郎大通りと呼ばれ、リニューアルされた競技場や体育館にはそれぞれ桃太郎スタジアムと桃太郎アリーナという名前がつけられた。駅の隣に新設されたコンベンションセンターの名前はままかりフォーラムである。いずれも、岡山の歴史や名産品と結びつけることによって、地域のブランドをめぐるイメージが掲げられている。

このような地方都市空間の再編成が進むなかで、地域で生活する人びとが目まぐるしく変化する空間を自分たちの拠り所であるべき場所＝地元として定義しようとするのはとても自然な流れなのかもしれない。外からの眼差しを意識しつつ、自分たちを固有の存在として確認する過程で安心できる場所としての地元への希求が高まっているのである。ナショナリズムは、排他性が社会に周知されているし、どこか大袈裟だ。だから、等身大で温もりの感じられる空間としての地元を、流動性と不安が高まる私たちの寄る辺のなさから解放してくれる拠り所として共有したいという感覚が広まっているようである（轡田 2010）。しかしまた、地方都市といえども、都市・農村部ともに郊外化が進展してきたことを踏まえると、お互いに顔の見えるような相互扶助的な共同体としての実体はなくなっているという意味で、地元は改めて「再発見」されているのだといえる。私たちはこれがかつて元神奈川県知事の長洲一二が提言した「地方の時代」に倣って、「地元の時代」とでも呼べばいいのだろうか（山本 1982）。しかしここで再発見されている地元とは、私たち一人ひとりの記憶や経験を取り巻く原風景として存在している主観的な概念であるジモトとは異なる論理で機能している点に注意を払う必要がある。地域アイデンティティといった社会統合を示す概念である地元と素朴な水準における個人的な帰属感覚（sense of belonging）を示す概念であるジモトのあいだには緊張関係が存在するはずなのだ。

1.2 地方、地域、そして地元へ

次に、地元という概念を地方・地域という概念を参照にしつつ整理してみたい。地元とならんで良く使われる言葉には、地方や地域がある。前者には否定的で開発の対象といったようなイメージが付与されており、後者にはそこで生活する人びとをエンパワーするような視線が感じられる。しかし、これらの言葉はどこか捉えがたく、抽象的な印象を拭えない。

そこでまず、私たちが使用している地方という言葉の紋切り型のイメージを概観してみることにする。ここでは、(1) 自然地理的特徴、(2) 都会に対する田舎としての地方、(3) 中央に対する地方、(4) 地域としての地方の四つに分類することとする。

まず地方は、その自然地理的特徴によって分類することができる。つまり、地理的な境界線によって定義された特定の物理的な空間を示す。英語にしてみると、area や zone に該当するだろう。この場合、関東地方や中国地方、ロシアの沿海地方や中国の内陸地方といったように国内外の比較的大きな地理を指すこと、また、国内外においても東京地方や岡山地方、カリフォルニア地方やミシガン地方などといったように比較的小さな地理を指すことが多い。細かい事例をあげればきりが無いが、いずれにしろ、これらの場合の地方は気候や風土、歴史や文化といった自然地理的な特徴やその条件の下に生まれた場所を指すために用いられる。

次に、これはとても日常的な使い方であるが、都会に対する田舎としての地方という意味で使わ

れている。英語にしてみると、countryに該当するだろう。例えば、「地方は刺激が少ない」「地方はのどかなところである」「私は地方出身です」などなど、その場合、地方は都会に対して田舎であると捉えられている。ただ、明確な判断基準は存在しないため、地方は良いイメージで語れる場合も悪いイメージで語れる場合もあり、その価値基準は相対的なものである。

この日常的な地方＝田舎のイメージを基底しているように思われるのが、中央に対する地方という捉え方である。英語にしてみると、localや辺境を指すperipheryに該当するだろう。そもそも地方とは、日本に限らずヨーロッパのregionやprovince、中国の県（懸）などは、統治と支配を目的とした軍事的な拠点をその語源としている。日本でも、室町時代の幕府の役職である地方（じかた）で、やはり地方を統治・支配するための拠点であった。

近代日本においては、地方官や地方改良運動といったように、地方は中央集権的な国家を目指した中央政府の統治・支配の対象であった。また、柳田國男に代表されるような民俗学的な視点からも地方の文化や風俗が語られ、再発見された。しかしそれは、地方に対する中央からのエキゾチックでノスタルジックな視点を抱えていた。さらに、戦後においても地方は中央による開発の拠点となり、日本の高度経済成長を支えた。いずれにしろ、中世・近世・近代と経て、地方は中央から価値を付与されることによって存在が意味づけられ、従属的な位置にあるといえるだろう。

しかし、1960年代後半ころから、世界で近代における産業化の発達をもたらした文明に対する反省的な気運が高まり、政府や大企業による地方における無秩序な開発や環境問題に対する責任が批判的に捉えられるようになった。中央に対する地方ではなく、そこで生活する地方自治体や生活者の視点から地域という言葉が用いられるようになった。経済学者の玉野井芳郎は「地域主義」(regionalism)を唱え（玉野井 1979）、その後社会学者の鶴見和子は西洋型の近代化モデルを脱却して、地域の風土に根ざしたオルタナティブである「内発的発展」の必要性を唱えた（鶴見 1996）。中央に対して従属的な地方という言葉に代わって、地方自治体や生活者の視点に根ざした地域という言葉が用いられるようになったのである。しかし、1970年代における「地方の時代」といわれた革新自治体の隆盛と退潮と運命を共にするかのようになり、それらの視点が現在も力強く受け継がれているとは言い難い。

以上見てきたように、現在では地方という言葉は、どちらかという自然地理的条件や田舎的なもの、中央に従属していることを指す場合が多く、地方の政治・経済・文化等の自立性を示す言葉としては地域という言葉が好まれて用いられるようになっている。しかし、地域という視点から地方を捉え返そうという試みが重ねられてきたにもかかわらず、疲弊や没個性といった負のイメージで語られる場合、今でも地方という言葉がメディアや日常で用いられる。地方の疲弊とはいわぬが、地域の疲弊とはいわれない。この事実が単純に示しているのは、地方はまだ中央に従属しているということである。またそれは、中央に従属的な地方で語られていない問題点が存在しているということである。言い換えれば、地方の人びとによる地方を批判的に捉えるという視点が無いのだ。

そして現在、地方や地域に代わって用いられているのが地元という言葉である。この言葉も、地域社会の流動性が高まってきたことを示すとともに、例えば近年のまちづくりに見られるように、——元気のない地元を盛り上げよう——といったように、そこで生活する人びとを再帰的

にエンパワーする視点から用いられている。このような新たなる自分たちの生活空間に対する注目の背景には、グローバリゼーションの渦中でローカルな固有性が失われているという危機感がある。地方の中心市街地の商店街はシャッター通り化し、田舎の豊かな田園風景がジャスコをはじめとする巨大資本の風景へと変遷している。消費社会研究家の三浦展は、このような地方の状況に対してファスト風土化という絶妙のネーミングを与えている。2000年の大規模小売店舗法（旧大店法）の改正にともない、大型店舗の進出の規制緩和が図られた結果、それぞれの地域特有の歴史や社会的なつながりが破壊され、地方はのどかな場所であるというのは幻想に過ぎなくなっているという（三浦 2004）。

その結果、地方で生活する人びとはグローバルに均質化された消費社会環境に包摂されていると捉えられる。地域社会の人びとや歴史と結びついた個性的な商店ではなく、グローバルな大資本が出店した消費環境へ依存する。そのような地方の人びとの消費社会的なライフスタイルを称揚するマーケティング戦略も行われている。ジャスコに行けば、「シブヤもハラジュクもうらやましくない！」というポスターが貼られている。「ジャスコしかないのかい！」と突っ込みを入れることも憚られるような雰囲気である。また、没個性的な消費環境は、地方における治安の悪化をもたらしているという。ファスト風土化が地域社会におけるつながりを解体し、それが郊外を中心とした地方での犯罪の増加と悪化を招いているとされている（三浦 2005）。またその背景には、日本の地方政策が公共事業に依存するいびつな就業構造の地方をたくさん生み出したということがあることも見逃せないだろう（五十嵐 2010）。

そのような地方郊外での危機感に対して、中心市街地では再開発と再活性化という二つの相反する動きが一体となって活発になっている。それはまさに先に述べた岡山市の中心市街地の光景だ。いずれにしろ、それらは地域アイデンティティとしての固有性を見出すエネルギーと結びつくことにより、地元志向という現象を生み出している。地方の中心市街地では、主要駅を中心とした再開発ビルやマンションが林立している。そして、そのような潮流のなかで、民・官・産・学が一体となった中心市街地を再活性化するための「まちづくり」が行われている。地方のローカル性を重視し、個性的な「まちづくり」をスローガンとして、様々な「〇〇塾」の設立や「持続可能な×××」というスローガンなどが謳われている。もちろんそのようなとりくみには、切実かつ重要な問題意識を備えているものも少なくない¹⁾。

しかし改めて再帰的なメッセージが込められたこの地元という言葉にも、どこか空虚な感じ、さらには保守性や閉鎖性を感じざるを得ない。地元といった場合、それは誰にとっての地元なのかという視点が見え難いのだ。とりわけ 1970 年代後半以降の村おこしやまちづくりでは、再帰的なものこそ——つまり近代がもたらした様々な問題に反省的であることを踏まえること——が新たなるグローバルな競争の資源として位置づけられていたことを踏まえると、再帰的＝反省的であることの本来的な意義がどこか置き去りにされている感は否めない。つまり、反省しているフリをして、

1) 例えば水俣市の職員を勤めていた吉本哲郎が提唱した地元学は、水俣病で苦しんだ地域住民が環境問題に特化して取り組んできたことから生まれてきたと述べる。都市と比較して「ないものねだり」するのではなく、自分たちの力でそれぞれの地域の自然や歴史を見つめなおすことの重要性を説いている。そこには、かつて水俣にはたくさんの知識人が集まり、水俣病が社会問題化されていたが、そのことは地域住民が自分たちで考え、行動するというところに結びつかなかったという反省が込められている（吉本 2008、結城 2009）。

反省しているのか、していないのか良く分からないことも見過ごされてしまうような状況がある。そしてその過程で隠蔽され、見え難くなっているもう一つのジモト像があるように思われるのだ。

2 地元現象

2.1 地元への包摂

地元の再発見は、ファンキーモンキーベイビーズのようなポピュラーカルチャーのみでなく、サブカルチャーの領域においても見ることができ、それらが諸地域のまちづくりと結びついている。例えば、レゲエ音楽と静岡県の焼津という地域を結びつけた PAPA U - GEE の『焼津港』（鈴木 2008）や埼玉県鷲宮町におけるアニメ作品『らき☆すた』など（山村 2008、谷村 2008）では、クールな文化と地元が結びつくことによってまちづくりが試みられている。岡山でも「ヨサコイ祭り」のフォーマットが踏襲された「うらじゃ祭り」など、地元意識とまちづくりが強く結びついた動きが活発である。これらの例を見てみると、地元へと包摂される文化は、必ずしもその地域に固有なものである必要はない。また、地域の均質性のみを主張するのではなく、文化の多様性には寛容である。例えば、最近流行しているクリエイティブ都市論では、多様性や他者への寛容性の高さは、魅力を高めるものとして理解されている（フロリダ 2007 = 2005）。つまり、グローバルに流通している文化やそのフォーマットを租借することはやぶさかではないというわけだ。多様性や他者への寛容性の高さは、クリエイティブな資源として地元を活性化するものとして受け止められているのである。障害者のためのユニバーサル・デザイン、外国人住民や観光客のための外国語のサインといった多様性を証明するインフラの整備は欠かすことができない。そのように、地域の固有性を掲げながらも、積極的に多様なものを受け入れる過程において、地元は改めて発見される。地元は、自分たちに居場所を与えてくれ、自分たちとは何者かという存在論的な意味を与えてくれる。多様性に寛容であり閉鎖的ではない。さらに、地元の固有性を魅力として外へと向かって発信することによって地域アイデンティティとして前景化していくのである。

クリエイティブな資源、グローバルエリートである外国人ビジネスマンや資本、海外からの観光客といったよそ者への寛容性を備えた、規模は小さいもののグローバル都市としての岡山市という側面は前景化する。そのことを通じて地元に対する誇りが回復すると受け止められるのである。しかしその同じ地元を受け入れられないヨソモノが地方都市の舞台裏には存在している。つまり、地元の前景化がある種のヨソモノの後景化をとまなっていることには注意を向ける必要がある。グローバル化に対する危機感から私たちの地元やそこで生活する人びとを守るために「どげんかせんといかん」と試みられるローカルなまちづくりや地元への包摂が、一部の例外を設けることによって成立しているとするならば本末転倒であろう。つまり、地元は誰を包摂し、誰を排除しているのか。例えば、まちづくりを主導することによって新しいローカルな権力や既得権益が発生することもあるとするならば、その意味を検討することも必要だろう。

2.2 地元を守る人、そこから排除されるヨソモノ

地元におけるヨソモノの排除はいかなる仕掛けによって生じているのだろうか。地方都市の中心

市街地を眺めれば、そのような仕掛けを散見することができる。それらは一方で、地元の都市空間をグローバルな基準を満たすための試みである。地元を魅力的な場所として再編成するための仕掛けでもあるのだ。しかしまたそれらは、魅力的ではない——つまり地元の魅力を損なう可能性のある人びとや風景——を排除する機能を備えている。

例えば、岡山市の表町商店街にある老舗デパートである天満屋。デパートの一階フロアを占有するプラダやグッチといった高級ブランド店のショーウィンドウや店内の化粧品店や貴金属売り場といった消費者的環境は、特定の顧客を選ぶ。イルミネーションが照らし出すブランドネームを背に接客している店員はなぜか上から視線。素顔が分からないくらいに分厚いメイクに覆われた店員はスマイルを絶やさない。フロアには商品と客が身につけた香水や化粧品の香りが充満している。そしてそこで買い物をしようと着飾った消費者の空間は、そこで消費する能力のない者を歓迎しない。自分の身だしなみが過剰に気になってしまう。そのとき、私たちは消費社会空間のヨソモノであるという視線を自らに注ぐことになる（渋谷 2003）。消費社会的な排除とは、経営側のマーケティング戦略における顧客像から逸脱している者を、空間に適合的なものではないとして浮き立たせる。

買い物や歩き疲れでちょっと一息つこうと思っても、まちの中に消費することなく過ごせる場所を探すのは大変だ。商店街に設けられたベンチも、何となくすわり心地が悪い。見た目もどこか不思議である。商店街にあるすべてのベンチには、長時間滞在した入り、横たわったりできないように様々な工夫が施されている。その中には、後づけで仕切りだけを加えているものもあり、トータルなデザインはどこか不気味だ。このようなベンチは排除型ベンチと呼ばれている（五十嵐 2004）。このようなすわり心地の悪いベンチは本来、マクドナルドなどのファーストフード店で客が長時間居座らないようにするためのデザインに由来するものであるが、それが公共の空間に存在してしまうことの意味は慎重に検討されるべきであろう。岡山市の中心市街地にはこれらの排除型ベンチと呼ばれるものが存在している。駅前、公園、公共施設、商店街の周辺にあるベンチには大抵の場合そのような排除のデザインが入り込んでいる。

00年代に入って、人びとによる防犯ボランティアのパトロールも盛んである。それは、都市の魅力を高めるための安心・安全のまちづくりの一翼を担っている。岡山市の中心市街地でも、行政、商店街、市民組織、地域住民らによる様々な防犯のためのボランティアのとりくみが行われている。例えば、1998年に発足した岡山ガーディアンズは、防犯ボランティアの市民組織である。メンバーは、サラリーマン、自営業主、主婦、学生などによって構成されている。ニューヨークで生まれたガーディアン・エンジェルズのモデルとマニュアルをほぼ踏襲したものである。ガーディアン・エンジェルズとは、1979年にニューヨークのブロンクス地区で始まった市民による犯罪防止のNPO団体である（Sliwa 1982）。現在では、アメリカ、ヨーロッパ、日本など世界11カ国で活動が行われている。日本でも、1996年にガーディアン・エンジェルズの日本支部が発足する。ボストン大学留学後に、ニューヨーク本部長を5年間務めていた小田啓二がその設立者となった。彼が日本にガーディアン・エンジェルズの設立の必要性を感じたのは、1995年に起きた自然災害と新興宗教による犯罪であった。小田は、日本における治安の悪化を「実感」したのは1995年に阪神淡路大震災の視察のために日本に帰国したときに「地下鉄サリン事件」に遭遇してからのことで

あると述べている（小田 2001）。岡山ガーディアンズは、日本ガーディアンズと友好関係にあるが、傘下団体ではない。メンバーによれば、地域のニーズに合わせた独自の活動の可能性を模索しているという。

岡山ガーディアンズがガーディアン・エンジェルズから踏襲している活動の理論的な支柱の一つは、心理学者であるフィリップ・ジンバルドが提唱し（Zimbardo 1970）、犯罪社会学者のジョージ・ケリングがモデル化した割れ窓理論と呼ばれるものである（Willson & Kelling 1982）。割れ窓理論とは、割れた窓に象徴されているように、犯罪の呼び水となりそうな場所に注目することにより、そのような環境を改善することが犯罪抑止効果を高めるとするものである。この理論では、犯罪者の背景や犯罪の動機などよりも、犯罪が起きそうな場所を重視することが強調される（小宮 2005）。岡山ガーディアンズの活動においても、強盗や殺人などの凶悪犯罪を活動の対象とはしていない。主に軽犯罪が取り締まりの対象となる。例えば、風紀を乱しかねないタバコのポイ捨て、ピンクビラ、自転車の二人乗りや無灯火などである。岡山ガーディアンズのメンバーは、ボランティアスタッフとして、夜の繁華街を歩き、まちに安心と安全を取り戻すために貢献している。

この活動の背景にあるメンバーたちの問題意識は、「見て見ぬふりをしない」(Dare to care) というスローガンに集約されている。「見て見ぬふりをしない」とは、人びとのつながりが失われることによって、お互いに無関心に陥る状況が犯罪の呼び水になっているという認識である。つまり、自分たちを包摂するべく共同体が崩壊に瀕しているという危機感が存在している。そのような認識ととりくみには、地元を安心で安全な場所にしたいというメンバーたちの切実な願いがこめられている。しかしもう一方で、例えばそのような安心・安全と考えられる空間にはホームレスの人びとの居場所はなくなってしまう。それは、岡山ガーディアンズのメンバーたちにとってとても悩ましい問題である。インタビューしてみると、ほとんどのメンバーたちはホームレスの排除は望んでいないのだと語った。むしろ、人びとを排除するのではなく、つながりを回復したいという気持ちの方が強いのだということが伝わってくる²⁾。しかし第3節で検討するように、そのようなある種の真摯さとは裏腹に、地元＝ホームを守ろうとすることが、結果的にホームレスの排除と関係してしまうことは、意図せざる結果であるといえるだろう。

2.3 地元のつながりは本当に失われたのか

しかし、岡山ガーディアンズのメンバーたちが考えるように、人びとのつながりは本当に失われたといえるのだろうか。あるいは、お互いに無関心な状況に陥ってしまっているのだろうか。ここでは、人びとのつながりが失われているという認識そのものが、実は多様なかたちで存在しているつながりの存在を排除することによって成立していることの問題について検討してみたい。このような認識のメカニズムについて、無料 Q & A コミュニティサイトである『教えて goo!』のある投稿質問をめぐるやりとりをヒントに考えてみることにする。このウェブサイトである幼い娘を持つ

2) 岡山ガーディアンズのメンバーに対するインタビュー調査より。著者は、2003年の11月頃から岡山ガーディアンズのパトロール活動等に参加している。これまで、多数の参加メンバーにはボランティア活動への参加動機やライフストーリーを含め、インタビュー調査を行っている。あるメンバーによると、パトロールをしてもっとも悩ましいのはホームレスへの対応であるという。「決して排除はしたくない」という思いとパトロールの対象であるというあいだでメンバーたちの気持ちは強く揺らぐ。

母親の投稿者は、「他人の子供を叱る人ってどう思いますか？」という質問とともに下記のコメントをウェブ上に投げかけた。

娘と公園に行った時の話です。私が目を放したスキに、娘が立ち入り禁止の花壇に入ってしまったらしく、それを見た60代前後の老婆が、「おじょうちゃん！そこに入ったらダメでしょ。ママは？」と叱りました。私はそれが聞こえる範囲内にいたので、すぐに娘のところに飛んでいき、「ごめんねーママが目を放したのが悪かったねえー」となだめ、老婆を睨みつけた後、その場を立ち去りました。それにしても、この老婆は何様のもりなのでしょう？子供に「立入禁止」の漢字が読めるはずも無い&意味も分かるはずが無いのに、怒るのは勝手だなあと思いました。子供を叱るったり注意するのは親の役目です。第三者から怒られる筋合いはありませんし、知らない人から怒られるのは人見知りの原因やトラウマにもなります。ストレスが溜まっているのか、正義の味方気取りなのかは分かりませんが、子育てに悪影響なので、本当にやめて欲しいです。最近、こういう八つ当たりする人が増えてきて、子供が育てられない社会になっている気がしてなりません。皆さんは、勝手に他人の子供を注意する人ってどう思いますか？（原文ママ）

この投稿者の質問に対して、様々な批判がスレッド上で起きた。そのほとんどが、この母親は身勝手であるという論理によるものだ。母親の個人的＝身勝手な解釈に対して、社会的な責任が要求されているわけである。むしろ、「他人を叱る人」がいなくなったことこそが問題なのだ、と。たしかに文面から窺われるこの母親の発言に身勝手な空気を読み取ることができるような気もする。「どうせ何も変わらないだろう」というある種の社会に対する無関心やシニカルな感覚があるのかもしれない。そして、このような個人的で身勝手な考え方は、社会のつながりを取り戻すために「どげんかせんといかん」対象として認識されることとなる。ここで機能しているように思われる論理は、身勝手さに対する批判とともに、人びとが社会への関心から撤退しているというものである。

しかし、このような危機感を支える論理は、社会の現実を正確に捉えているといえるだろうか。むしろ、この母親に対するコメントにおいて批判される身勝手さとは、彼女が個人的に開かれているローカルな文脈抜きには理解できないのではないか。そしてまた、彼女自身も自分の子供を叱った老婆の個人的な文脈を踏まえていないのではないか。つまり、社会的であると想像されるものと個人的であると想像されるものが安易に結びつけられていることにこそ問題があるのではないだろうか。そのように考えると、「どげんかせんといかん」というロマンチックな表現も、「どうせ何も変わらないだろう」というシニカルな表現も、同じコインの表と裏なのである。そしてこのような社会への無関心に対する批判においては、個人的な背景は問われないのだから、善し悪しは別として存在する様々な雑多なつながりを存在しないものとして排除する政治として機能する。このことによって、社会のつながりを回復したいという意識が高まり、社会のつながりが失われているというロジックは成立するのである。冷静になって社会的現実を捉えなおすためには、個人の自立と社会への参加を早急に求める前に、個人的な領域やその周りに存在する他者の存在に目を向けるべき

なのではないだろうか。

この図式を社会的統合の概念である地元と個人的な概念であるジモトに置き換えるならば、両者を安易にむすびつけて考えることによって見えなくなっていくものを検討する必要があるだろう。次節では、地元とジモトが結びつくことによって生じる多様性の排除を考察するために、そのような社会的包摂から排除されるヨソモノの視点からもう一つのジモトの姿を浮き彫りにしてみることにする。

3 地元のヨソモノ

3.1 ヨソモノから地元像を問いなおす

それでは、地元から消えたヨソモノたちは、どのような空間を生きているのだろうか。以下では、地元には包摂されないヨソモノの人びとに焦点を当てることにより、もう一つのジモトを描き出してみたい。

総延長1キロ以上にもおよぶ岡山市中心市街地で最大規模の表町商店街では、テナントの高齢化や後継者不足が進んでいる。一日中シャッターを降ろしている店舗も多く見られる。岡山市と倉敷市の郊外のショッピングモールにシネマコンプレックスがオープンした影響で、かつて存在していた映画館が閉鎖されたこともあり、商店街の南側の地域はとくに元気がない。商店街の営業時間が終われば、閑散とした商店街にはゲームセンターの外側に設置された UFO キャッチャーの電子音が静かに漏れ、その周辺にかすかに広がっていく。このゲームセンターには、地元の人びとがとくに注目することはないが、様々な人びとの交流の場として機能している。これは、日本中の裏寂れた地方のゲームセンターに広がっている光景や人びとのつながりであるに違いない。おそらく地元の魅力を高める資源であると受け止められることはないだろう。しかしこのような人びとの営みは、紛れもなく存在するもう一つのジモトの姿なのだ。

ゲームセンターには様々な人びとが集う。地元の私立大学に通う大学生はゲームに熱中している。中学校を卒業して以来、学校にも通わないし、働いていないニートの若者たち。その中には、何カ月も実家に帰っていないという少年もいた。UFO キャッチャーで取った景品でコスプレしている少女たち。自分たちのコスプレ姿を携帯電話の写真で撮影し、ゲームセンターの他の仲間に見せては喜んでいる。換金不可能なパチンコや競馬ゲームで一喜一憂するサラリーマン。そして、野宿生活をするホームレスの若者たち。彼／彼女らは、携帯電話のメールアドレスを交換し、ジュースや煙草、ゲーム料金やコインを融通しあうなかで、その寂しい場所を意味あるものにするためにメンテナンスし、社会とのつながりをギリギリのところで保っている。このように、経営的には必ずしも芳しいとはいえない地方の裏寂れた商店街のゲームセンターも、居場所を失ったヨソモノたちの拠り所となり、自己を確認し、文化を営む場所となっている。

しかし、ゲームセンターにおけるこのような営みはますます不可視なものになっている。とりわけ、ホームレスの人びとを取り巻く環境に注目すると、地元において彼／彼女らの存在がますます見え難いものになっていることに気づく。例えば、彼／彼女らの居場所や寝床は公共空間から消えている。なぜならば、かつての寝床であった裏寂れた商店街や公園は、まさにグローバルな基準を

満たすべく再開発の対象ともなっているからだ。その結果、ホームレスの人びとにとっての居場所はますます限られたものとなっている。一つの場所に安住するのは難しい。ほとんどの人びとは、つねに移動を繰り返している。河川敷や公園、空きビルや知人の住居などを転々としている。

例えば岡山出身の徳永君（仮名）は、2年くらい前からホームレスとなり路上生活をしている。他の家族は岡山に住んでいるが、関係が良くないために何年も会っていないから頼ることはできない。しかし、つねに路上で生活しているわけではない。彼の生活はかなり流動的で不安定なものだ。ゲームセンターなどで知り合った知人のところに身をよせることもあれば、出会い系サイトで知り合って交際している彼女と一緒に住むということもある。2年前には、営業停止した空ビルの二階のテナントに住んでいたこともある。

ある夏の夜、彼や他の友人たちとともにその空きビルに遊びに行ったことがある。空ビルの入り口には鍵がかかっているため、ビルにある非常用の梯子が出入り口となっている。辺りは歓楽街なので、通行人も多い。タクシーや代行の車も多く停車している。人目につくので、主に出入りすることができるのは深夜過ぎである。人目を忍び、一人ずつ素早く梯子を登り、彼の部屋へと到着した。彼が寝床としていたこの場所は、かつてはスナックであった。元スナック入口のドアを壊し、そこが出入り口となっている。電気や水道は止まっている。夜間は蝋燭を照明の代わりとして用いなければならない。

彼の部屋にはかつてのようにお客の姿はなく、当時のカレンダーが寂しく吊るされている。蝋燭に照らされた部屋には、不思議な光景が広がっていた。同じ階にある他の店舗にも人気はない。夏だったせいもあるが、小便の臭いが部屋に充満している。しかし、その後ビルを改装することになり、彼はそこを出ていかざるを得なかった。現在では、非常用の梯子のあるビルの側面には、侵入できないようにネットが張ってある。

3.2 もう一つのジモトの姿——ホームタウンのホームレス

地元には包摂されないヨソモノたちが生きている空間に様々な営みが存在していることは確認できたと思う。以下では、著者と同じホームタウンで育ったホームレスである河島君のライフヒストリーを記述しつつ、地元と河島君のつながりを確認することによって、もう一つのジモト像を浮き彫りにしたいと思う。

河島君は、著者とほぼ同年代の生まれである。私たちは、岡山市を中心に岡山野宿者支援の会が行う炊き出しで出会った。同じ岡山市で高校生までを過ごし、共通のポピュラーカルチャーやサブカルチャーの経験を共有している。同じジモトで育った同時代感覚を共有しているといえるだろう。それだけではない。共通の知人もいる。彼の育った場所も著者が良く知っている場所であり、「ホーム」をめぐるアイデンティティを共有している。高校を卒業して岡山を出て行き、また戻ってきたという点でも著者と同じである。私たちは、お互いに共通する様々な場所を歩き、その過程でそれぞれの記憶を語り合ったのだった。私たちのバックグラウンドには違いも多いし、2007年の5月まで著者はこの街で彼の存在に出会うことはなかった。しかし私たちのジモトをめぐる記憶は時に重なり合い、そのことを通じてお互いのジモト像が再構築されていくのだった。例えば、かつて二人が別々に通った岡山市の西部にある神社の初詣の記憶は、異なった視点から出会うことに

より、その記憶を取り巻くジモトのリアリティがより確かに確認されていくのであった。

河島君は、1975年に大阪で出会った岡山市出身の父親と九州出身の母親のあいだに生れた。しかし、河島君の母親は彼が幼い頃に亡くなってしまった。物心ついたときには、岡山市郊外の住宅街で父親と継母とともに暮らしていた。彼には腹違いの弟と妹がいる。郊外の一軒家の暮らしのなかで、前妻とのあいだに生れた河島君は冷遇を受けた。小学生の頃から、週末になると美装業を営む家族の仕事の手伝いに彼だけが駆り出され、手伝いをした。近所の同級生や友人たちが楽しそうに遊んでいる傍ら、彼は家族の仕事の手伝いをしなければならなかった。

地元の公立高校を卒業した彼は、1994年に岡山を出て、東京の大手建設会社に就職した。2年間勤めた後、彼は転勤で大阪に引っ越すことになる。そこで仕事を通じて知り合った他の建設会社の知人に誘われて転職するが、1年も経たないうちに辞めた。そしてここから、水商売で働くようになり、「ヒモ生活」が始まった。大阪での生活も5年が経ったころ、彼は、同居していた女性とのトラブルが警察沙汰になり、岡山に帰ることになった。

実家での生活に馴染めなかった彼は数ヶ月で実家を飛び出し、岡山県の県北の街へと引っ越した。そこには、かつて大阪で知り合い交際していた彼女が身を寄せていた。まもなく、男の子も授かった。しかし、彼女との関係がうまく行かなくなり、彼はその街を出た。

岡山へ戻った彼は、住み込みで風俗店での仕事を始めた。しかし1年間働いた後に、「要領の良い奴ばかりが出世する」ような人間関係が嫌になり仕事を辞め、そこから現在にまで至る長いホームレス生活がスタートすることになる。公園、河川敷などを転々としたのちに、6年にもおよぶホームレス生活を続けている。今や彼は、岡山滞在歴がもっとも長いホームレスの一人である。

河島君との出会いを通じて著者は、これまで出会うことのなかったジモトで生活する人びとや風景を発見するなかで、社会において排除される者やそれを取り巻く風景とのつながりが批判的に確認されていったのであった。

3.3 河島君のお仕事

河島君の生業は、一言でいえば廃品回収業だ。しかしそれは、彼にとっては「宝探し」のようなものだそうだ。彼は自分自身のイメージを「ヒッピーのように生きている」という。確かに、夏には長髪・古着・下駄という人びとに捨てられたゴミをうまく着こなしたファッションに身をまとった彼はヒッピー風なのである。例えば、厚生労働省が行っているホームレスの自立の支援等に関する特別措置法³⁾及びホームレスの自立の支援等に関する基本方針に基づいて実施される施策の効果を把握するための調査で用いられている「全市区町村における巡回による目視調査」という方法で彼をホームレスであると判断することはできないであろう。

廃品回収業といっても河島君は自動車を持っていないため、自転車で回収して周る。彼が働くのは人目につきにくい日が暮れた時間帯。深夜になると自転車で岡山市の中心市街地を周る。ホームレスの生業は普通の個人事業主と同様につねに流動的である。ちょっとした環境・条件の変化に

3) この法律で指すところのホームレスとは、「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、生活を営んでいる者」（第一章総則第二条）に限定されている。笹沼弘志が指摘しているように、もともとホームレス (homeless people) とは、野宿者のみならず、不本意な施設入所や強いられた同居、DV被害者などを含む広範な概念である (笹沼 2008)。

よって頼りにしていた収入口がある日なくなってしまう。その意味で彼／彼女らの仕事は一般的にイメージされる「普通の仕事」と別物なのではなく、その延長線上にあり、「社会でもっとも不安定な個人事業主」というような形容が相応しいかもしれない。

まず、彼の収入源のなかでもっとも安定しているのが粗大ゴミである。毎週火曜日になると河島君は、自転車で中心市街地を周る。次には電化製品の類があげられる。パソコン・テレビ・コンピューターゲームやソフト等々は、それを長年使った人には価値がなくてゴミとしか思えないような物、あるいは回収してもらったらリサイクル料金を払わなければならないような物も売ればちゃんとお金になる。あとは、鍋やフライパンといった金属くずもお金になる。ステンレスや銅線などはとても良い収入源となっている。そして、彼が収入源としてもっとも頼りにしていたのが古本と音楽CDである。これらは、他の業者が大量に廃棄したものを拾い集め、それを他の業者に転売することによって収入を得るといふ、業者のビジネスモデルを逆手に取ったものであるといえるだろう。

本当にお金がない時には、河島君はアルバイトをする。河島君はすでに廃業した大手派遣会社に登録しており、日雇いで働いて現金収入を得ることもある。JR 岡山駅周辺に新しくオープンしたBIC カメラの建設作業の現場では3週間ばかり働いた。しかし、自らの素性を派遣先や現場の労働者たちに理解してもらうのは難しく、あまり居心地が良いわけではない。また、ゲームセンターや商店街などで知り合った人びとから日雇いの仕事を請け負うこともある。

このように、河島君の仕事は地域社会やそこで生活する人びとと切り離されるものではない。ジモトにおけるささやかなつながりのなかで独自のビジネスネットワークを形成し、生活費を捻出しているのである。

3.4 河島君の家計簿から考える

地方都市の中心市街地を歩いていると、のんびりと家族や友人と時間を過ごす場所がないということに気づく。もちろん、喫茶店もあるシカラオケもある居酒屋もある。しかしそれらはどれも消費をする場所。全国資本のチェーン店はとりわけ味気ない。つまり、お金を払うことなく過ごせる場所というのは本当に減っている。公園のような公共の空間は存在するが、それはどこか没个性的で退屈だ。あまりそこで時間を過ごそうと思えるような場所でもない。とくに再開発された公園などはオープンスペースが大半を占める外観は良いと思うのだが、何だか自分自身が人に見せるための風景の一部になったようで、長時間いると居心地が悪い。地方都市といえども、私たちは消費社会に過剰に包摂されるなかで生活しているのである。河島君の日々の生活を見ることを通じて浮き彫りになるのは、そのような消費社会的環境に生きている私たちの姿だ。

河島君にとって中心市街地に消費する以外にのんびりとする場所がないということはとても重要な意味を持っている。すでに指摘したように、消費する以外の場所がないということは、ずっと消費者であり続けなければならない。デパートや商店街、カフェ、ファミレス、スポーツジム、観光地、などなど様々な消費の場所にはそれぞれに適合的な消費者として求められる空気がある。そしてそこから逸脱すれば、どこか「不審者」を見るような眼差しを感じてしまうのである。

河島君は、仕事をしていない時間の大半を表町商店街にあるインターネットカフェやゲームセン

ターで過ごす。河島君に家計簿をつけてもらい、どのようにお金を使っているのかということを知ることにつれて分かったのは、ホームレスの生活はそんなに安くはないということだ。岡山で河島君が利用しているインターネットカフェは、シャワーを利用することもできるし、朝食はご飯と味噌汁はお代わり自由である。ネットゲーム好きの河島君にとっては、インターネットカフェは匿名で他人と交流することのできる場所であり、自分が拾ってきた物の市場価格を調べる場所であり、かつて生活していた東京や大阪の思い出を語れる場所であり、何よりも普段の生活の中で得ることのできないプライベートの空間を確保できる場所なのである。そのようにインターネットカフェは彼の生活を支えるとともにひと時のプライバシーと安らぎを提供してくれる場所だ。

しかし、インターネットカフェの生活は決して安いとは言えない。1ヶ月泊まることを考えてみれば、4万5千円近くになるのである。しかも一日10時間利用できるだけである。インターネットや食事のサービスがあるにしても、それは決してお得とは言えない。

他の河島君の出費で主な物は食事代とタバコ代だ。河島君の場合はガスコンロを持っているので、安いインスタントラーメンを買ってきて作ることができるが、あまり込み入った料理はできない。定住の場がないホームレスの場合は、ほとんど自炊することはできない。その場合、やはり何かを買わなければならない。中心市街地にスーパーは少ないから、当然コンビニを利用することも多い。そしてコンビニは確かに便利なのだが、スーパーなどと比べると値段は高めだ。冷静に考えてみれば、この時代に定価でしか物を売らないコンビニより高いところなんてないのかもしれない。このように、ホームレスの生活はあまり安いものではない。むしろ、生活基盤がないがゆえに選択する便利さはとても高価なものである。それらは、収入が安定している人びとが時間を購入するようにデザインされたものなのである。

4 おわりに——もう一つの意図せざる結果

地元から排除されるヨソモノの空間に目を向けると、消費社会への過剰なまでの包摂と公共空間からの排除といった、私たちが見ようとしないう一つのジモトに存在する様々な社会問題が浮き彫りになってくる。排除型ベンチのようにホームレスの生活にとって致命的なデザインが、地域社会で生活するすべての人たちにとっても排他的なものであるということを想像させてくれる。このことは、地元志向がホームレスの排除と結びつくのみではなく、自分たち自身が排除している自己像であることを明らかにしている。そしてこのようなスパイラルが、私たちの不安を増大させてしまう。

それでは、そのようなヨソモノの存在を代償とした地元はグローバル化時代に適格的かつローカルな固有性を魅力として発信できるような場所になったのだろうか。むしろ、再開発とまちづくりの結果現れてきたのは、全国の地方都市の中心市街地に広がる没個性的なものである感は拭いきれないのではないだろうか。地域ブランドを掲げてはいるものの、どこか既視感のある景観やまちづくりのとりくみには、場所やそこで生活する人びとの固有性が反映されているとは言い難い。そう苦々しく思うのは、私だけではないと思う。

地元を魅力あふれる場所にしようと試みたまちづくりがもたらしたもう一つの意図せざる結果と

は、排除をとまなうのみでなく、何か夢や希望を持つことのできない没个性的でどこかシュールなまちが出来上がってしまったことである。その場所で生活する者にとって、そのようなシュールさは受け入れがたい。そうだとすれば、「どげんかせんといかん」と焦って地元とジモトを安易に結びつけるような地元志向ではなく、そのことによって本当に失われてしまうつなかりに目を向ける必要があるだろう。そのような地平に、もう一つの過去と現在と未来を結ぶようなオルタナティブな価値観や地域像が浮かび上がってくるのではないか。

参考文献

- フロリダ、リチャード、井口典夫訳、2007=2005、『クリエイティブ・クラスの世紀——新時代の国、都市、人材の条件』ダイヤモンド社。
- 五十嵐太郎、2004、『過防備都市』中央公論新社。
- 五十嵐泰正、2010、「北の「荒野」を往く——開発主義と向き合うドライブ紀行」『Posse』Vol. 7、72 - 92 頁。
- 小宮信夫、2005、『犯罪は「この場所」で起こる』光文社。
- 轡田竜蔵、2010、「過剰包摂される地元志向の若者たち——地方私立 X 大学出身者を対象とする比較事例研究」樋口明彦『東アジアにおける若者問題』法政大学出版局。
- 三浦展、2004、『ファスト風土化する日本——郊外化とその病理』洋泉社。
- 三浦展監修、2005、『検証・地方がヘンだ!』、洋泉社。
- 小田啓二、2001、「ガーディアン・エンジェルズの犯罪防止活動とコミュニティづくり」西川芳明、松尾匡、伊佐淳編著『市民参加のまちづくり——NPO・市民・自治体の取り組みから』創成社、67 - 82 頁。
- 笹沼弘志、2008、『ホームレスと自立／排除——路上にくる幸福を夢見る権利>はあるか』大月書店
- 渋谷望、2003、『魂の労働——ネオリベリズムの権力論』青土社。
- Sliwa, Curtis, and Schwartz, Murray, 1982, *Street Smart: The Guardian Angel Guide to Safe Living*, Addison Wesley.
- 鈴木慎一郎、2008、「“レペゼン”の諸相——レゲエにおける場所への愛着と誇りをめぐって」鶴本花織・西山哲郎・松宮朝編『トヨティズムを生きる——名古屋発カルチュラル・スタディーズ』せりか書房。
- 玉野井芳郎、1979、『地域主義の思想』農山漁村文化協会。
- 谷村要、2008、「インターネットを媒介とした集合行為によるメディア表現活動のメカニズム——『ハレ晴レユカイ』ダンス『祭り』の事例から——」『情報通信学会誌』vol.25 No.3。
- 鶴見和子、1996、『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- Wilson, Q., James, and Kelling, L., George, 1982, “Broken Windows: The police and neighbourhood safety”, in *The Atlantic Monthly*, March, pp. 29-37.
- 山本英治、1982、「[「地方の時代」から「地域の時代」へ]』『現代のエスプリ』No.176、5 - 20 頁。
- 山村高淑、2008、「アニメ聖地の成立とその展開に関する研究——アニメ作品「らき☆すた」による埼玉県鷲宮町の旅客誘致に関する一考察——」『北海道大学国際広報メディア・観光学

ジャーナル』 No.7。

吉本哲郎、2008、『地元学をはじめよう』岩波書店。

結城登美雄、2009、『地元学からの出発——この土地を生きる人びとの声に耳を傾ける』農山漁村文化協会。

Zimbardo, G., Phillip, 1970, “The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation, impulse, and chaos, in W. J. Arnold & D. Levine eds., *1969 Nebraska Symposium on Motivation*, University of Nebraska Press, pp. 207-307.

新聞

『朝日新聞』2010年5月15日朝刊

インターネット

「教えて goo!」、(<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/6041959.html>、2010年7月20日にアクセス)

Abstract

An Alternative Image of Locality: Rethinking Localism from Case Studies of Young Homeless People in a Regional City

KAWABATA, Kohei¹

Based on fieldwork in the author's hometown of Okayama, this paper aims to explore some of implications of the current popularity of localism or the “jimoto phenomenon” in contemporary Japan, focusing on its historical development, as well as how its drive for local inclusiveness brings about the exclusion of homeless people. It begins by examining the concept of jimoto as a dual local identity, distinguishing a socially inclusive concept of jimoto from a concept of jimoto that expresses a more individual sense of belonging. Further, in order to elaborate the current implications of these concepts, the genealogy of jimoto is examined, along with its relation to related terms that also suggest local identity such as “chiho” and “chiiki”. Secondly, the rise of localism is examined as it appears in subcultures and town revival activities. In particular, this paper looks at the activities of a volunteer patrol group called the Okayama Guardians. Based on participant observation and interviews, it elucidates how their reflexive grassroots activities aimed at realizing a safer and more comfortable town can unintentionally bring about the exclusion of homeless people, and argues that it is necessary to look more directly at our ties to excluded people. Thirdly, based on fieldwork research with young homeless people of my hometown, I indicate how the reconstruction of local identities, begun in the aim of retrieving local uniqueness, has another unintended consequence: the diminution of local uniqueness.

¹ Kwansai Gakuin University

Against these unintended consequences of contemporary localism, this paper tries to illuminate an alternative type of local identity.

Keywords: local identity, reflexivity, exclusion, homeless people